

久利美和

東北大学は大正2（1913）年、我が国の大学として初めて3名の女子学生を理学部に入学させた伝統がある。しかし、平成19年5月現在の女性教員比率は8.8%にすぎず、第3期科学技術基本計画に掲げられた25%の目標を達成するためには非常に多くの課題がある。そのような中で、我々は男女共同参画の実現に向けて取り組んでいる。ここでは、本学の自然科学系分野での取組みを中心に紹介する。

男女共同参画の取組みの経緯

本学では国の男女共同参画基本法制定に先立つ前年の平成10年に「東北大学の在り方に関する検討委員会」で男女共同参画に関する議論が始まり、平成13年4月に男女共同参画委員会が全学組織として発足し、全国に先駆けた平成14年9月の東北大学宣言、毎年の男女共同参画シンポジウム開催、男女共同参画奨励賞、アンケート活動を通じ、学内における男女格差の是正、研究・労働環境の改善、両立支援体制の充実などに努めている。そして、平成17年9月には学内教員学生を対象とした川内けやき保育園を開園した。また全国の大学・機関での連携による男女共同参画推進のための大学間ネットワークの形成を進めた。しかしながら、構成員の多くが自然科学系分野である本学の特性から、自然科学系に所属する女性研究者の物理的制約、特に実験等による時間と設備の両面から拘束が大きいことを考慮した特段的措置と、次世代の女性科学者の育成が不可欠であることが痛感されていた。そのような状況において、本学の「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」が平成18年度文部科学省科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル育成」事業の一つに採択され、女性研究者育成支援推進室を中心として鋭意活動しており、現在、3年計画の第2年度にある。

杜の都女性科学者ハードリング支援事業

杜の都女性科学者ハードリング支援事業では、女性科学者のキャリア・パスの障害として抽出した三つのハードルについて、それぞれを乗り越えるための育児介護支援、環境整備、次世代支援のプログラムを展開している（図1）。

① 育児・介護支援プログラム

育児支援におけるインセンティブとしての研究支援員利用制度は育児中の女性教員等へ実験補助者を長期派遣する制度で、平成18年度7名が利用し、今年度は7名が利用中である。ベビーシッター利用料補助制度は女性教員・院生等がベビーシッターを利用する際の経費を補助するもので、平成18年度3名が、今年度は7名が利用中である。育児のための短時間勤務制度は、現在の育児休業制度の弾力的運用であり、週20時間までの部分休業を認めている。昨年度検討を進め、平成19年4月より全学的な制度として試行中である。また同時に勤務時間を考慮した個人の研究・教育業績評価とともに、部局としての取組みも評価が進められている。

② 環境整備プログラム

東北大学病院の病後児保育室「星の子ルーム」が拡充され、全学の教職員と学生が利用可能になり、結果利用者が増加した。また、女性用休憩室の整備も進行中であり、昨年度末にはすべての自然科学系研究科への設置が完了した。

③ 次世代支援プログラム

博士課程進学的女子学生支援や科学者を志す女子中高学生啓発のために、自然科学系女子大学院生によるサイエンス・エンジェル（SA）制度を創設し、平成18年度39名、平成19年度52名を採用した。SAはスキルアップ講習会等で研修を受けた後、可能な限りSA自身が主体となって母校訪問等を企画し実施している。平成18年度は、仙台市内の高校訪問と理系白書シンポジウム、仙台市科学館での「来て、見て、触って、感じる科学」等のイベントに参加した。平成19年度は、宮城一女高、

久利美和 東北大学特定領域研究推進支援センター

E-mail kuri-m@mail.tains.tohoku.ac.jp

Miwa KURI, Nonmember (Center for Research Strategy and Support, Tohoku University, Sendai-shi, 980-8578 Japan)

電子情報通信学会誌 Vol.91 No.2 pp.157-158 2008年2月

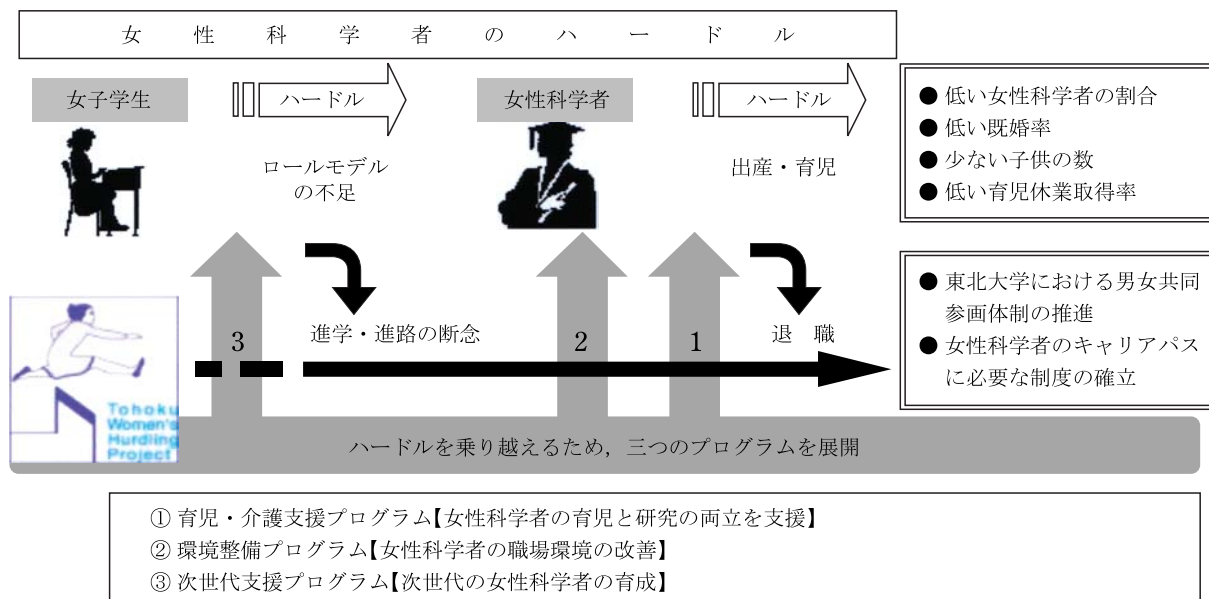


図1 東北大学「社の都女性科学者ハードリング支援事業」プログラム概要図

沖縄八重山高校、湘南白百合学園等11月末までに13校へ母校訪問を行うとともに、大学オープンキャンパスや近隣地域での体験型科学イベントなど、経験と専門性を生かした活動を行っている。また、全学的女性研究者交流のために、「東北大学女性研究者フォーラム」や各部署での女子学生交流会の開催、更に、ネットワーク(MORIHIME.NET)の設立が進められてきた。

工学系で活躍中のサイエンス・エンジェル(SA)紹介

瀬戸文美さんは、「機械系なら東北大」がキャッチフレーズの東北大学大学院工学研究科バイオロボティクス専攻博士後期課程の3年生である。人間協調型ロボットをテーマとする第一線のロボット研究に加え、昨年度からSAとして、更に工学研究科機械・知能系男女共同参画推進委員会交流会の学生スタッフとして活動している。また学会でも『Women in Robotics：共同参画社会のロボティクス』のコーディネーター、ロボット学会若手ネットワーク・オープンセミナー『ロボティクスが拓く未来』のオーガナイザーを務めるなど、「男女共同参画」、「次世代支援」、「サイエンスコミュニケーション」

をキーワードとした様々な場面で活躍している。2006年12月の理系白書シンポジウムでの「昔から工学系の女性比率は消費税率と同じと言われてきた。やっていけるか」というと、入ってしまえば不安はない。“女性”という共通項でいるんな世代、分野の人が集まることができる。ととても得だ。」という彼女の言葉は、常に現状を認識し、肯定要素を見いだしていく彼女の姿勢をよく表している。来年度からは研究職に採用が決まった。

自然科学系分野における男女共同参画の推進に向けて、克服すべき課題は山積するが、ハードルを一つずつ着実に乗り越えていきたい。また、情報通信学の分野でも、個性豊かで、活動的な大学院での研究を経験した女性たちに、ぜひ、注目してほしい。

(平成19年11月30日受付 平成19年12月3日最終受付)



くり みわ
久利 美和

筑波大大学院地球科学研究科了.博士(理学).筑波大VBL非常勤研究員,地質調査所科学技術振興事業団特別研究員,東北大大学院理学研究科研究支援員などを経て,現在,東北大特定領域研究推進センター助手として「社の都女性科学者ハードリング支援事業」に従事。